

時代の向かう先 本質の見極めを

「共謀罪」

表現者から

戦争は昔の話。本当にそう言い切れるのだろうか

私が11歳のとき太平洋戦争が始まった。東京大空襲では、逃げていた途中に川に落ちて危うく死にそうになる経験もした。

向島区(現・墨田区)の区議だったおやじは「日本は戦争に負ける」なんて言うもんだから、治安維持法違反で3回警察に引っ張られた。当時は戦争遂行のための「隣組」があった。「助けられたり、助けたら」という歌詞の明るい歌もあるが、住民同士を相互監視さ

作家 半藤一利さん(86)



関田航撮影

はんどろ・かずとし
「日本のいちばん長い日」
「ノモンハン」の夏」など昭和史関連の著作多数。「文芸春秋」の元編集長。

せる機能も果たした。いつの世も、民衆の中には政府に協力的な人がいる。「刺す」という言い方もあったけれど、おやじを密告した人がいたんだろう。

歴史を研究してきた経験から言えるのは、戦争をする国家は必ず反戦を訴える人物を押さえつけようとするということだ。昔は治安維持法が使われたが、いまは「共謀罪」がそれに取って代わろうとしている。内心の自由を侵害するという点ではよく似ている。

治安維持法は1925年の施行時、国体の変革を図る共産主義者らを取り締まる明確な狙いがあった。その後の2度の改正で適用対象が拡大され、広く検挙できるようになった。

政府は今回の法案の対象について「『組織的犯罪集団』に限る」「一般の人は

関係ない」と説明しているが、将来の法改正によってどうなるか分からない。

私に言わせると、安倍政権は憲法を空洞化し、「戦争できる国」をめざしている。今回の法案は(2013年成立の)特定秘密保護法や、(15年成立の)安全保障法制などと同じ流れにあると捉えるべきだ。

「今と昔とでは時代が違

う」と言う人もいるが、私はそうは思わない。戦前の日本はずっと暗い時代だったと思ひ込んでいる若い人もいるが、太平洋戦争が始まる数年前までは明るかった。日中戦争での勝利を提

高揚感に包まれていた。それが窮屈になるのは、あつという間だった。その時代を生きている人は案外、世

の中がどの方向に向かっているのかを見極めるのが難しいものだ。

法案が複雑な上、メディアによって「共謀罪」「テロ等準備罪」など様々な呼び方があり、一般の人は理解が難しいだろう。でも、その本質をしっかりと見極めてほしい。100年先まで禍根を残すことがあってはならない。(聞き手・岩崎生之助)